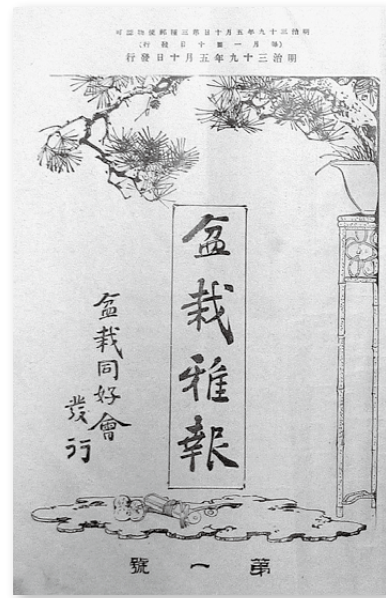


【収藏品紹介】  
『盆栽雅報』(第一号、明治三十九年)



『盆栽雅報』第一号(盆栽同好会、明治39年5月)

『盆栽雅報』は、日本ではじめての盆栽専門の月刊誌として知られています。創刊は明治三十九年五月、大正六年に一三九号で廃刊となりました。香樹園村田利右衛門と薫風園蔵石光蔵を発起人とする「盆栽同好会」によって発刊され、編集は『萬朝報』の生島一(号：無待庵)が行っていました。

『盆栽雅報』第一号〜三〇号を収蔵しました。今回はこのうち第一号の記事を取り上げ、紹介したいと思います。第一号で注目されるのは、冒頭に掲げられている「発刊の辞」です。ここから盆栽同好会の創設と『盆栽雅報』の発刊の背景がわかります。「発刊の辞」によれば、『盆栽雅報』を発刊するに際しては、「概を同好に飛ばして其賛成を求めたり」とあるように、香樹園と薫風園は当時の盆栽愛好家に対して「概文」を作成し送付していました。第一号には「最も高尚にして而かも独り自ら楽み得るは盆栽なれども…」という言葉から始まるその文面が掲載されています。これによれば、①盆栽は自分ひとりで楽しめる最も「高尚」な趣味である一方で、「同志」が集まって一緒に鑑賞し談笑する楽しみはなお一層深いものがあること、②しかし「陳列会」の開催は年々一〜二回と少な

く、③この原因は、盆栽をはじめとして「書画骨董の末」に至るまでひとつひとつの選択に意を凝らす「一席持ち」と呼ばれる手間暇の掛かる陳列のあり方にあること、④これに対して、「最も簡便なる方法」によって「月次盆栽会」を開催し、さらに当日の写真や席上の談話などを雑誌に掲載することで、参加できなかった者も誌面を通じて楽しみを共にすることができると、が発刊の趣旨として述べられています。

では、「軽便なる月次盆栽会」とはどのようなものだったのでしょうか。盆栽同好会が結成される以前の明治時代における盆栽は、明治一八年に当時芝公園にあった紅葉館(明治一四年に誕生した高級料亭)で陳列会が開催され、明治二五年には東京向ヶ丘の料亭・神泉亭で大々的な「美術盆栽大会」が開催されているように、料亭での陳列会が主でした。これに対して、第一号には、盆栽同好会が創設時に香樹園で開催した第一回の陳列会(明治三十九年四月)の様子が写真で掲

載されています。画像①を見ると、一席に出品者三名の盆栽が陳列されており、また画像②には一つの卓に二名の出品盆栽が陳列されています。このように「軽便なる月次盆栽会」とは、一席に複数名の出品盆栽を陳列することで、「一席持ち」の際に必要なとなる席飾りの調度品の数々を、省略する試みでした。言わば「盆栽陳列の合理化」を行い、陳列会の負担を軽減することで、開催数の増加が企図されていたのです。

また、『盆栽雅報』発刊の背景について、は、当時、「盆栽を以て我邦特有の美術品なりとするの議論」が盛んだったが、盆栽が「美術品」となるには、「真面目に研究すべき一個の芸術たり」えなければならず、ここにおいて「専門雑誌」の必要性が認められる点に、「我徒をして本誌を発刊せしめたる一理由なり」と述べられていることも重要です。ここからは、「社交」のためだけではなく、「美術品」としての盆栽「研究」も視野に入れた発刊であったことがわかります。実際に第一号には、談話だけではなく、「海棠」「御柳」「竹」の培養方法や「清国の陶磁器 附盆栽鉢」などの論考が並んでいます。盆栽の芸術性については、後に『盆栽』主幹の小林憲雄が大正末年頃から積極的な主張を展開していきませんが、組織的な取り組み(研究)は『盆栽雅報』の段階から行われていたのです。日本ではじめての盆栽専門の月刊誌『盆栽雅報』(と盆栽同好会)は、盆栽の「普及」と「研究」の両面から見て画期的な雑誌(と組織)でした。盆栽界としての「普及」と「研究」への取り組みは、ここからスタートしていったのです。



画像① 右から新井半兵衛氏の海棠、田辺正助氏の石付楓、金谷氏の松



画像② 右から田谷常吉氏の檜、亀岡新八氏の水榎樹(イボタノキ)